

会長浅野晴風氏) 五百円。河内の宿1竹内薫  
峰▼牧水「旅」1太田尾桜風▼井内侍1中山  
札風。絃諸遊清風▼重衡1本橋錦風▼坂崎出  
羽守1岩崎竜風▼須磨の春1野口嶮▼彰義  
隊1福島脹水▼竜の口1大関英子▼吉野落1  
1若林晴凌▼小栗栖1高田栄水▼城山1杉山  
雅俊▼本能寺(下)1山下晴楓▼湖水乗切1会主  
浅野晴風。

錦心流関西新進演奏会

七月十六日(日)昼大阪天神橋朝陽会館、主催  
小川吟水氏。金剛石1吟水会員▼白虎隊1山  
田▼城山1増田▼湖水乗切1北村玄水▼巖流  
島1金寄靖水▼山科の別れ1小西雨水▼(以  
下賛助出演)吉野山懐古1菊地庸子▼恩響の  
彼方へ1中野、住田▼本能寺1十河、近藤、  
岡本、内田▼河中島1村上▼羅生門1前田絹  
水▼菊水の旗1吉山瞳水▼羽衣1内田華水、  
可原誠水▼茨木1安江弘水▼大江山1稲葉卓  
水、近藤登水、杭東詠水。絃中野淀水▼西郷  
隆盛1尾山好水▼竜の口1木下皇水▼小栗栖  
中山鳳水▼敦盛1会主小川吟水、江原錦和。

京都祇園八坂神社奉納演奏会

七月二十三日(日)夕五時、京都琵琶協会協賛。  
1次号詳報1  
東西合同一泊弾交會  
七月三十、三十一両日、四明会・正絃会・  
鶴絃会共催。浜松市西遠荘。1次号詳報1

テレビ・ラヂオ琵琶放送

○1五月六日(出)A P V テレビ。弘前市中村光  
水氏の琵琶製作実況に続き同氏作詞作曲の  
「古城」を約二十分間放映。  
○1六月十日(出)晚九時四十五分NHKテレビ。

大阪石橋旭嶺氏「関ヶ原」の一節を放映。  
○1七月十三日(日)昼三時NHK。FMラヂオ。  
鶴田錦史氏「敦盛」放送。  
渡辺浴水(謙助)氏 老衰のため七月  
末日逝去、享年九十六才。謹んで哀悼の意を  
表し御冥福を祈る。(京都市左京区岩倉西河  
原町一五〇ノ四。一水会京都支部所属)

予告

○：京都琵琶協会八月定例会 八月十三日(日)  
屋一時本部平井春嶺氏宅。  
○：琵琶を染しむ会 八月六日(日)昼一時神戸  
市(主催者田中漱水氏支障のため延期し後  
日改めて開催)。  
○：琵琶三美会演奏会 八月二十日(日)正午京  
都東山松原上ル安井金比羅宮会館(会長矢  
吹旭美津女史)。会員の外山崎旭幸、鈴木  
流泉、久徳旭蘭、梅原旭濤、木下皇水各氏  
ゲスト出演。(前号記載八月十九日京都商  
工会議所とあるは会場の都合で上記に変更)  
○：琵琶楽コンクール 八月二十日(日)午前十  
一時東京日本橋第一証券ホール、主催日本  
琵琶楽協会。  
○：琵琶詩吟一泊納涼会 八月二十七、八両  
日伊香保温泉白雲閣大ホール(針谷錦古氏  
一門)。  
○：晴風会演奏会 九月十九日(日)夕六時東京  
中野北部公会堂(会長浅野晴風氏)。  
○：雅俊会演奏会 九月八日(日)屋二時東京上  
野本牧亭(会長杉山雅俊氏)。  
○：筑前琵琶協会全国大会 十月七、八両日  
横濱市立小ホール(司会横濱旭会)。  
○：創立三十周年記念琵琶各流派大演奏会  
十月二十九日(日)屋京都商工会議所ホール。  
主催京都琵琶協会(会長平井春嶺氏)。

暑中御見舞申上げます

植村 冀 水

あがと

猛暑の昨今絃友同好各位益々御健  
勝お慶び申し上げます。古諺に曰く  
「心頭を滅却すれば火もまた涼し」  
●夏に弱筆者などつとめて「心頭  
滅却」に努力するが凡夫の浅ましさを、鬼もす  
れば「暑い」の一言が思わず口からぽろぽろとばし  
り出る。●あと一ヶ月余りの辛棒、お互いにこ  
の暑さを克服して爽秋の訪づれを待とう。●珍  
らしい「平曲」と「首僧琵琶」の記事を現代  
琵琶人の参考の一助にも最近の新聞から特  
に転載した。●七月号の本欄で歌の中抜きをせ  
ず演奏会で時間が足りなければ分奏或いは合  
奏で全曲を聴かせたいという一ファンの  
声を紹介したところ秋田の保坂さん外二、三  
の方からこれに共鳴の手紙や電話を頂戴した  
●奏者自身は中抜きの文句を知っている上での  
演奏で、心の中では前後が繋がっていると思  
っているのだが聴者には歯が抜けたよう得意  
味の通じないこともある。●琵琶楽発展上重  
要な問題として一考の必要を痛感する。

昭和五十三年八月一日発行(非売品)  
編集者 植村 冀 水  
発行所 高槻市津之江北町一ノ二二三  
電話 〇七二六(七三六)〇五一番

琵琶  
機関紙

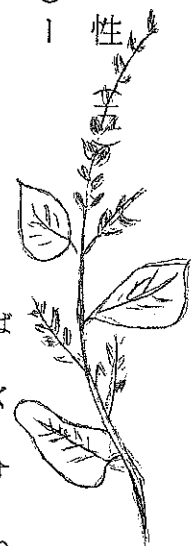
京

結

第二九〇号 京絃社

戦国時代の女性

1 白拍子(続) 1



静御前と虎御前

権力者の寵愛を自ら捨てた仏御前のような  
悟りに入った白拍子に対して、最後まで愛人  
へのみさおを守りぬいたのが静御前である。  
静御前も戰場慰安婦として、源氏の陣営に  
招かれたのが義経と接する動機となったので  
あろう。兄頼朝から謀反の疑いをかけられて  
平家を滅亡させるうえにあればどの勲功をた  
てた義経は、兄の討手を逃れるため、九州へ  
落ちのびんとして摂津から船出したが、暴風  
雨にあつてひそかに上陸、僅かな家来と静だ  
けを伴ない大和の宇陀へおもむくが、北条時  
政の軍勢がそこにも押し寄せてくるときいて、  
吉野の山深く逃れることになった。「もうこ  
れ以上、女の足では無理であろう」と義経に  
云い含められた静は、悲しい別れをつける。  
義経はそこから奥州に向うが、静は吉野山の  
麓で吉野の法師に捕えられ、北白川より鎌倉  
へ召し出された。当時、静は懐妊中で、間も

なく男児を生んだが、義経の子であるため由  
比ヶ浜で殺される。静は、いくら糾問されて  
も義経の行き先を告えず黙否権を貫徹した。  
仕方なく静は頼朝の家臣安達新三郎の屋敷に  
預けられる。  
ある日、頼朝からの使者が来て、舞いを所  
望された。静は口惜しく思ったが、意を決し  
て若宮八幡宮で舞うことにした。そのとき、  
静が舞いながら歌った即席の自作「しづやし  
づ賤の小田巻繰り返し昔を今になすよしもが  
な」「吉野山嶺の白雪踏み分けて入りし人の  
跡ぞ恋しき」の二首。静の目には頼朝もな  
く、人もなく、その心は義経以外何者をも認  
めなかつた。まさに愛情の勝利である。失意  
の義経にとつて、静の美しい愛情は無限の力  
をなしてあり、「義経記」の悲劇性を色どる艶  
にして哀しき存在は静である。静の八幡宮で  
の舞いは、女性として最大の愛情の発露と云  
えるだろう。

その後、静は許されて京へ帰り、母と共に  
出家して翌年往生をとげたとも、安達の屋敷  
で居間に鏡を据え、その中に自分の顔を写し  
ながら夫義経の面影をしのび、鑊剣を咽喉に  
突き立てて自害したとも伝えられている。没  
年僅かに十九才であったというから、義経に  
見染められたときは、十七、八才だったこと  
になる。たとえ、白拍子という遊女風情の出  
身でも、源家の武将の妻として、その花の命  
を「吉野山嶺の白雪」や「しづやしづ」の歌  
で飾ったことは、日本恋愛史上、特筆の値が  
あろう。

勿論「義経記」に語られている静の行動は  
伝説上のもので、作者が悲劇の主人公を強調  
するためのフィクションとも考えられよう。  
然し少なくとも、義経は史実として存在した  
のだったし、その愛妾に静御前が配されてい  
ることは、白拍子と武将との恋が戦国時代に  
は、有り得てふさわしいものであったことを、  
我々に感じさせずにはおかない。

もう一人、白拍子でありながら仇討ちの助  
太刀をした大磯の虎御前について一言したい。  
虎御前は曾我十郎の愛人で、十郎・五郎が工  
藤祐経を討つため、彼の動静をさぐるのに一  
役買っており、彼等が富士の狩場で工藤の陣  
屋に迫る際に手引きをしたのがお虎であった。  
してみれば彼女は、狩場に白拍子として呼ば  
れ、酒席で舞ったり、或いは一定期間陣屋に  
宿泊し、武将の夜伽もしたものと考えられる。  
それでなければ手觸をつけて、曾我兄弟が陣

屋に忍び込む案内をするなどという芸当が出来た。その後消息不明となり、つい数ヶ月前琵琶会ポスターから私の住居を知り、二十年振りて連絡がとれた私にとっては、肉身上の存在で、文字通り涙の対面となったが、その情緒感については割愛することとして、二週間余の函館を後に、青森県は弘前市の校友齊藤鉄舟氏方を訪ねた。

この鉄舟氏は、東北に於ける斯界の重鎮として人望も高く、青森県に於ける有力者で、無二の世話好きでもあった。

私が招かれたのは観月会を兼ねた宴席だったが、集まる十数名が何れもひとかどの名手ぞろいだった。

いま思い出の日記をたづねれば、奏者と曲目左の如く、皆忘れ得ぬ出来栄であった。

①彰義隊一斉藤鉄舟 ②小督一天風 ③乃木大将一工藤岳春 ④玉昭君一内山嘯月 ⑤薄田一工藤岳春 ⑥城山一鈴木岳青 ⑦櫻城一工藤岳春 ⑧武蔵野一内山嘯月 ⑨旅順開城一工藤岳春 ⑩天風

時は昭和十一年九月三十日午後四時より、料亭「いくよ」の大広間で夜半十二時迄の八時間、洵に楽しい集いだったが、今は語るに由なく没後鉄舟氏の記録を見れば、吉村岳城師、中山鳳岳師等私の先輩を始め、須田綱義先生、伊集院鶴城先生等諸大家をもお招きして、東北の地に斯道発展の労を惜しまなかつたその熱意は、尊敬にあたえするものと思ふ次第である。



我が道を行く  
六十五年  
西郷 天風

さて、この画友と旧交を温め得たことによつて、渡道目的の大半は達し得た気持ちで、速水君の消息に接し得ぬことにはあまり気にならなかつた。あとは十年振りの風物を楽しみながら、かつて早稲田雲井館時代の学友が、近頃函館に居ることを知り、其処を訪問すべく札幌、小樽を素通りして函館に急いだ。

この学友小原久忠は、当時新設された早稲田工手学校に私を無理矢理に転校せしめ、琵琶研究に専念することの有利なるを力説した真の理解者で、早稲田工手から岩倉鉄道学校

を経て、常磐鉄道入社当時までは交遊が続いたが、その後消息不明となり、つい数ヶ月前琵琶会ポスターから私の住居を知り、二十年振りて連絡がとれた私にとっては、肉身上の存在で、文字通り涙の対面となったが、その情緒感については割愛することとして、二週間余の函館を後に、青森県は弘前市の校友齊藤鉄舟氏方を訪ねた。

この鉄舟氏は、東北に於ける斯界の重鎮として人望も高く、青森県に於ける有力者で、無二の世話好きでもあった。

私が招かれたのは観月会を兼ねた宴席だったが、集まる十数名が何れもひとかどの名手ぞろいだった。

いま思い出の日記をたづねれば、奏者と曲目左の如く、皆忘れ得ぬ出来栄であった。

①彰義隊一斉藤鉄舟 ②小督一天風 ③乃木大将一工藤岳春 ④玉昭君一内山嘯月 ⑤薄田一工藤岳春 ⑥城山一鈴木岳青 ⑦櫻城一工藤岳春 ⑧武蔵野一内山嘯月 ⑨旅順開城一工藤岳春 ⑩天風

時は昭和十一年九月三十日午後四時より、料亭「いくよ」の大広間で夜半十二時迄の八時間、洵に楽しい集いだったが、今は語るに由なく没後鉄舟氏の記録を見れば、吉村岳城師、中山鳳岳師等私の先輩を始め、須田綱義先生、伊集院鶴城先生等諸大家をもお招きして、東北の地に斯道発展の労を惜しまなかつたその熱意は、尊敬にあたえするものと思ふ次第である。

かくて、初めての客なれど引き止められる好意に甘え、数日間逗留中のところへ、水戸の志友から、かねての予定通り田中光頭伯主催の「維新志士慰霊祭」を、水戸の大洗神社にて取行なわれるにより、至急帰れと連絡があり、更に、東京杉並区の天井村塾からも、十一月三日の夕刻迄に出演方を申込んで来た。右のうち、前者は三月ばかり前、上野の松坂屋呉服店に於て「維新の志士遺墨展覧会」を、田中光頭伯によつて催された折すでに計画の中だったが、開催日未定のまま、私は常に連絡の責任を負うており、弘前の滞在は報じておいたし、後者の方は、林統十郎閣下関係の農村革新指導機関に類するもので、前者と常に連携を保ちある人々の新運動が、結成された第一報であった。

その名も「天井村塾」、つまり杉並区「天沼」と「井草」の両村を結んだ農村運動機関とでも申そうか、兎に角十月末までの途上、放送局などに立寄りながら帰京してみれば、神戸の藤田俊雄氏からも私の下阪期日を問い合せて来た。

ところで「維新の志士慰霊祭」は大洗海岸東光台の明治記念館（東京の多摩明治記念館と同様、明治大帝御馬上の御銅像を安置）の境内で、前の内大臣田中光頭伯のもとに取行われたが、私は一同より一と足先に帰京、その足で杉並区の大井村塾へと急げば、折りから林閣下の講話がすんだ直後らしく、私は休息のいとまもなく「錦の御旗」を演奏、ひと

息いれて「小督の局」、続いて「九連城」で結んだ。

大体この日、昭和十一年十一月三日は、天井村塾創立記念として、五日間の講習会を開いたその中の国祭日に当るので休講、琵琶によつて心を清めながら祝福しよう、というたてまえた。従つて琵琶演奏は三日の旗日一日だった筈、ところが毎朝七時の冷水浴に初まり、午前中の農業学習、午後の農耕実習と仲々厳しい日課で身心共に疲労甚だしく、夕餉後の休養時間に聴く琵琶の一曲は、実に身心爽快の感深く、疲労回復に最適の清涼劑として、爾後天井村塾の講習会には、何処の地なりとも同行することを約束するに至った。

その後、秋田山形方面を数回廻り、三月央は山形の庄内から広島へのコースがさまり、漸く正派月報社の代表藤田俊雄氏の招聘に迎える機会を得た。約三年ぶりだったが心よく迎えて下され、京阪神の諸名手と共にある神社境内の演奏会で、諸大家の御批判に預つた次第だった。

それも広島への途上として、日程にゆとりなきまま満足な御挨拶も出来ず、諸賢に欠礼の段にまだ汗顔に絶えぬ次第である。

(訂正) 六月号「我が道を行く六十五年」の末尾から三行目「爆弾一勇士」は「爆弾三勇士」の誤植につき訂正します。一係一



会津戦争異聞

一 厳寒と飢餓に泣く

会津藩士！

辻 旭 城

会津若松鶴ヶ城の悲史といえ、少年白虎隊ぐらゐりより知られていない。

「戦雲暗く風絶えて 忠烈永久に名を残す 古城に牙ゆる月の影 花も会津の白虎隊 誰が吹く笛ぞ音も恋し 花も会津の白虎隊」

筆者はいつか会津戦争について調べたいと考えていたが、文献等も見当らず困っていたところ、このほどやっと叶えられてペンをとることができた。

明治元年九月二十二日の若松鶴ヶ城明け渡しによって、戊辰戦役の山場、会津戦争は幕を閉じ藩主松平容保、世子喜徳ほか家門一統は、即日城外の妙国寺に移り閉居謹慎、家臣一同は武装解除の後五里ほど東の猪苗代城に集結を命じられ、軟禁されることとなったが、武士の面目上帯刀のみは許されていた兵士たちに向い、沿道に蝟集して見物中の官兵や軍夫らは罵声をあびせる者、涙や唾を吐きかける者もいたけれども、さすがは会津藩士、平然自若として隊を乱す者はいなかつたという。かくて綿のように疲れた藩士たちは猪苗代に到着した。

家老山川浩は、主君の命により焼け残った鶴ヶ城明け渡しの責任者として、城の内外を清掃し、武器弾薬の旧式大砲五十一門、小銃二千八百四十五挺、その他一物も残らさず整理記帳の末、焼け残りの小屋に至るまで奇麗に片付けて、翌々二十四日官軍に引継ぎ、彼自身も猪苗代へ移った。

その年の十月十九日、江戸城内の征討軍総督府より急遽召喚を受けた戦犯藩主松平容保父子は、山川浩ほか重臣十余名を引連れて上京した。

早速拘禁の上厳重な訊問が行われ、この取調べは翌二年五月まで続いた結果、無条件降伏開城の条件通り、藩主父子は死一等を減ぜられ、代りに三番家老萱野権平一人が、反逆抗戦の罪名で切腹を申し渡された。萱野は従容として会津藩の再興を念じつつ、五月十八日の朝まだき、四十二才の生涯を閉じた。

それから間もなく、猪苗代城に監禁中の藩士一同も東京へ召喚されることとなり、折りから梅雨の降りしきる中を、敗惨の身そのまま乞食同然の哀れな姿で、列をつくつて奥州街道を送致された。かつて三年前には、京都守護職として天下を威圧し、偉風堂々上京した雄藩会津の、打つて変つた惨憺たる凋落の姿を見て、街道筋の人々は息をのむ思いをしたという。そして着京後は俘虜として、音羽護国寺ほか三ヶ所に監禁された。

会津藩の総督を命ぜられた山川浩は、飯田町火消屋敷跡に開設を許された藩事務所、

旧重臣たちと共に各収容所の統轄と、会津藩の再興運動に狂奔した。

やがて九月二十七日、会津松平家の再興が聴許され、容保の実子慶三郎(当時一才の赤坊)が容大(かたはる)と改名の上家督を継ぎ、十一月四日には華族に列せられたので、会津藩全員は聖慮の忝けなきに感泣しつつ、再建への決意を新たにしたのであった。

この時、新政府の内意として、旧藩領の一部猪苗代で三万石か、或は南部藩から割譲する陸奥国二の戸、三の戸、北の三郡三万石の新領地の何れを選ぶかとの極秘の通達が届いた。

藩首脳部は協議の結果、陸奥の僻地に新天地を開拓せんとする意地から、敢えて最果ての地下北半島を選んだ。その決意で藩名も新たに「斗南藩」と名づけた。これは「北斗以南皆神州」という語句の意を借りて「この度藩地は北遷することとなったが、我々は天皇の国土より追放をうけた訳ではなく、我々も天子さまの赤子」であり、尊王の志士であるのだ」という会津藩士の赤誠と、意志を表明した命名であった。

元来会津藩は、本知職俸等に合わせて石高を換算すると、六十七万九千石の大藩であった。それがこの度の降伏により僅々三万石に減俸の上移封されたのであるが、藩主以下家臣一同は鴻恩に感激して移住を決意したものの、この朔北の火山灰地の荒野が、三万石はるか実収僅か七千石という瘦地であって、

寒風吹きすさぶ北海のこの環境が如何に厳しく、如何に飢餓との苦しい戦を挑まねば生き抜くことの出来ぬ荒蕪地であるかということ、予じめ察知していた者は一人もなかった。かくて維新の最酷たる刑罰が、新生斗南藩士達の上に課せられていったのである。

### 「盲僧琵琶」の

#### 余命を保つ

毎日新聞から転載



熊本、宮崎県境に近い鹿児島県の内陸部。標高五、六百米の小高い山々に囲まれた大口盆地は静かな田園地帯である。田や畑の中には、あちこちに「田の神どん」と呼ばれる石像があり、いかにも南国の神にふさわしく、柔和な表情を見せている。

こんな環境の中で絶滅しかかっている「盲僧琵琶」の余命が保たれている。薩摩、筑前、平家などのわが国の琵琶音楽の源流とも云われる「盲僧琵琶」だが、現在、これを伝える盲目の僧侶はほんの二、三人。中でも、この大口盆地の同県伊佐郡菱刈町荒田に住む富貴島順海は、盲僧琵琶の復活に貢献した人として、貴重な存在である。

盲目と信仰——津軽には恐山のイタコ信仰がある。越後のごぜたちも、病人やおかいこ

さんの前で歌わされ、農民たちの信仰の対照になることもあった。そして、筑前、薩摩に強大な組織を誇っていた盲僧琵琶の僧侶たち……彼等は天台宗に属し、比叡山延暦寺を大本山に仰いでいる。

「得度したのは昭和五年です、十四才の時でした。目がこの通りなので、何かしなけれはいけないと周りから云われまして……かと言って貧しかったものですから盲学校にも行けませんでした。」

大正五年生まれだから六十二才。最初は、たた生き抜いていくために僧門に入った。この地方の盲僧をとりしきる常楽院(同県日置郡吹上町)の当時の住職は、あまり琵琶には熱心ではなく「琵琶は芸人がするもので、我はお経を詠んでいけばいい」という方針だったため、彼の入門当時は琵琶を教えてくれる先輩はほとんどいなかったという。従って彼が本格的に琵琶をやるうと思いついたのは、第二次大戦後のことである。

本来、薩摩地方の盲僧琵琶の楽器は三弦、六柱で、特に運び易いように小型で軽かったが、順海が始めた時は既にこうした琵琶がなかった。そこで彼は四弦四柱の薩摩琵琶でスタートすることにした。

「目が見えませんが、私の聴き覚えです。それでも、耳が良い方だったので上達は早かったようです。そして、ある程度薩摩琵琶を覚えてから、この琵琶を使って、かつての盲僧琵琶と同じようにお経を唱える方法を

考えたのです」

盲僧の唱えるお経は地神(じしん)経である。この妙音十二楽と呼ばれる演奏を間に挟みながらお経を唱える。十二楽は十二の節からなっており、まつかぜ、むらさめ、すぎのもり、のきのみず、ごちようし、わすればち、ななつはし、やつはし、ろくちようし、ばんしき、ぼうのこえ、ごしようがく。

「これは何人かで弾くのですが、私がやり始めた時、やれ、ここで一の糸だ、いや違う、二の糸をたけ、とお年寄はまちまちのことを云うのです。そこで私は、この際しっかりした形にしておかなければと思ひ、一つの形に作曲して復活させました。」

そして毎年十月十二日に、盲僧たちが集って常楽院で開く地神祭では、彼の作った妙音十二楽が奉納されるようになったという。

盲僧琵琶は、かつては壇家廻りといって、宗徒の家々を廻って托鉢(たくはつ)のようなことをする習慣があった。また「門琵琶」といって壇家以外の家々も廻っていた。住職が好まないとは云っても、戦前までは自己流で廻る僧が何人かいたようである。

現在、彼は地神祭のほか、特別乞われたとき以外、殆んど盲僧琵琶を弾くことはない。寧ろ敬老会など福祉関係の集まりで「薩摩琵琶」として演奏する事の方が多いという。

最後に彼は、説教を素材にして胴をつけたという「老の坂」を薩摩琵琶師として披露してくれた。

「老の坂、登り登り登り登り登り登り登り、急がぬ道の死の近さ、思えばことも旅、また行く先も旅なれば、いづこの土が我をまつらむと、思えば僅かに世の中は、五十年の仮りの宿……」

彼はこれまで四人の後輩に盲僧琵琶を指導したというが、折角復活させたこの風雪が、いつまでも続くだろうか。(以下略) (演奏中の写真省略)

### 平曲全曲をテープ収録

#### 館山甲午氏一生の大作完成

河北新報から転載



世界に誇れる日本の中世叙事詩「平家物語」全章を琵琶の伴奏によって語りうたう平曲演奏家館山甲午さん(仙台市国見三丁目九ノ三)が滅びゆく貴重な文化遺産を永久に残そうと、七年がかりで取り組んでいた録音テープ収録がこのほど完了した。

近く宮城県文化財保護課に寄贈されるが平曲の保存に生涯をかけていただけに、館山さんは「これで思い残すことはない」と喜ぶもひとしおだ。

館山さんが吹き込んだテープは個数にして百六十三個。このうち表裏に吹き込んだのは八十三個あまり、全曲再生すれば実に百四十

三時間余になる。昭和四十六年から精神集中のできる日を選んで自宅でコツコツと始めた事業だった。

館山さんは明治二十七年弘前市の生まれ、代々江戸平曲(前田流)の流れをくむ津軽平曲演奏家で、館山さん自身も少年時代から父親漸之進の教えで平曲を学び、秘曲に至るまで全二百曲を習得。後に東京音楽学校(芸大前身)で近代音楽を手掛けたが平曲の紹介と採譜、研究を続けた。わが国では只一人の「平家物語」全曲の伝承者として貴重な存在となっている人で、昭和二十九年河北文化賞受賞、同四十四年には国の重要無形文化財に指定されている。

「祇園精舎の鐘の聲」で知られる平家物語はもとも琵琶法師の奏でる音曲によって語り継がれてきたものだが、明治以降文学性の面だけ強調され、音楽性の方は何かと体面を保つ程度にしか評価されなくなった。館山さんは音楽家としての立場からも「平家物語」は「読み本」ではなく音曲に合わせた「語り物」であることを主張し続けてきた数少ない一人。「平曲は日本の音曲の源流です。昔からの五音階で構成された見事な音楽なんです」。平曲の保存と伝承は、いわば館山さんの執念だった。

「テープ収録は宮城県と仙台市から平曲保存のために頂いている資金(年額各十万円)を充てました。そのお礼の気持ちも込めて贈ることにした」と館山さんは語る。全曲収録

# 暑 中 御 見 舞

# 暑 中 御 見 舞

<p>〒603 京都市北区平野宮西町六番 電話〇七五(四六二)一四二三番</p> <p>薩摩琵琶四明会 京都琵琶協会 日本琵琶染協会</p> <p>平井春嶺</p>	<p>〒604 京都市中京区西ノ京西唐垣町一番 電話〇七五(八四二)二九八八番</p> <p>錦心流琵琶 牧南水</p>	<p>〒359 埼玉県所沢市中新井二ノ二八 電話〇四二九(四三)〇九二八番</p> <p>薩摩琵琶錦水会 正絃会・四明会会員</p> <p>岡部錦蝶</p>	<p>〒485 浜松市安松町三三ノ四 電話〇五三四(六一)三五五四番</p> <p>正絃会・鶴絃会々員 箕流柿沢篁峰</p>
<p>〒569 高槻市南総持寺町 電話〇七二六(九六)八五一六番</p> <p>吉井良三</p>	<p>〒658 神戸市東灘区御影中町一ノ一 電話〇七八(八五一)二二六三番</p> <p>錦心流琵琶一水会 琵琶を楽しむ会</p> <p>田中紋水</p>	<p>〒617 向日市上植野町山の下一二 電話〇七五(九三一)二〇四六番</p> <p>筑前琵琶橋会 法香久院</p> <p>櫻井旭富</p>	<p>〒606 京都市左京区岡崎徳成町一四 電話〇七五(七七)四〇一六番</p> <p>荒木旭媛</p>
<p>一水会神戸支部 詩吟部 事務所 西宮市羽衣町七ノ三四 三浦連水方 電話〇七九(三三)五八八七番</p> <p>顧問 松野紫雲 支部長 三浦蓮水 理事 反町紫雲 事務 山崎島田村 女流 川崎華桂 女流 吉田秋蘭 女流 吉田梅蘭 女流 吉田博蘭 女流 吉田珠博 女流 高柳花柳 女流 滝内優水 詩吟部 一同</p>			

<p>〒523 近江八幡市正神町一〇 電話〇七八三(二二)〇五四七番</p> <p>錦心流琵琶・国風流詩吟教授 野田勇治郎 (杉水・国堂)</p>	<p>〒350 川越市南通町一ノ二ノ一一 電話〇四九二(二二)四四六一番</p> <p>熊木菰水</p>	<p>〒188 東京都府中市新町二ノ六八 電話〇四二二(六一)五六八四番</p> <p>坂本錦道</p>	<p>〒336 浦和市別所四丁目一番十五号 電話〇四八八(六一)八〇一九番</p> <p>錦心流琵琶一水会本部理事 錦心流一水会埼玉支部顧問 花俣圭水</p>
<p>〒156 東京都世田谷区経堂三三三七六 電話 (四二八) 七四八三番</p> <p>薩摩琵琶 正派西郷天風</p>	<p>〒520 大津市中央一丁目一番十号 電話〇七七五(二二)四二五〇番</p> <p>戸倉旭嶺</p>	<p>〒625 舞鶴市朝日通五條東入 電話〇七七三(六四)〇五一八番</p> <p>日本旭会舞鶴琵琶協会 教室・事務所 高橋旭洋</p>	<p>〒671-20 姫路市花田町高木一八ノ四 電話〇七九二(二三)七一九五番</p> <p>大阪中央部旭会 北中旭蝶</p>
<p>京都琵琶協会 会長 平井方 電話〇七五(四六二)一四二三番</p> <p>伊吹正 馬場正 林旭 戸倉旭 若宮旭 楊中 田村旭 植田旭 梅原旭 野田旭 矢野旭 安住旭 山本旭 山崎旭 古本旭 荒木旭 阪本旭 木村旭 木下旭 水内旭 峰水 昇水</p>			

舞 見 御 中 暑

〒520

大津市逢坂一丁目一三ノ三  
(蟬丸神社前)  
電話〇七七五(二四)九三二八番

松岡旭岡  
伊藤旭暢

〒651

神戸市葺合区上筒井五ノ四ノ二  
電話〇七八(二二)一一六一番

宝塚花組  
上原まり  
(旭艶)

筑前琵琶旭堂会  
旭会大師範  
柴田旭堂

〒678

相生市相生三丁目一四ノ一七  
電話〇七九二(二二)五一八番

浜本旭好

〒653

神戸市長田区梅ヶ香町一ノ一五  
電話〇七八(六七)〇〇一八番

筑前琵琶日本旭会  
田中旭昇

舞 見 御 中 暑

〒154

東京都世田谷区太子堂二丁目  
二番八号  
電話 (四一四) 六五七八番

宮崎直二

〒370-12

群馬県高崎市岩鼻町扇前二四七  
電話〇二七三(四六)二〇〇六番

宗家針谷錦古

全朗協関東副部長  
テイチクレコード専属  
群馬琵琶連盟会長  
日本錦古流総本部会長

〒348

越谷市大成町一ノ二三三九二  
電話〇四八九(八二)  
一二四一番代

日本琵琶振興会長  
鈴木流泉

スズセイKKビル

〒111

東京都台東区駒形一ノ一ノ五  
薩摩・筑前・楽器研究所  
所長 鈴木流泉

電話〇三(八四五)  
二二二八番

# 暑 中 御 見 舞

〒617

向日市西向日鶏冠井町山端  
二番地  
電話〇七五(九三一)一六九一番

梅原旭濤

〒431-31

浜松市積志町一八三一  
電話〇五三四(三四)〇八七一

薩摩琵琶鶴絃会  
会主  
小野鶴彦

〒113

東京都文京区根津二ノ一五ノ二  
電話(八二一)五七〇八番

錦・都派琵琶本部  
家元 錦穂  
外会員一同

〒156

東京都世田谷区八幡山二ノ一  
電話〇三(三二九)三五五〇番

琵琶洲楓会  
会長 大館美江子

〒606

京都市左京区下鴨蔭倉町一六  
馬場鴨水方  
電話〇七五(七八一)三〇五〇番

錦心流琵琶  
一水会京都支部  
会員一同

〒570

守口市緑町土居団地一  
小川吟水方  
電話〇六(九九二)五六二五番

錦心流琵琶  
一水会大阪支部  
会員一同

# 暑 中 御 見 舞

〒420

静岡市西草深町二ノ二〇  
電話〇五四二(五三)一四七一

吟詠 赤心流  
琵琶 赤心流  
家元 赤心流鶴翁

〒569

高槻市津之江町二丁目十二ノ三  
電話〇七二六(七一)六五八〇番

大和流琵琶吟家元  
山崎光椽

〒544

大阪市生野区小路二ノ二六二五  
電話〇六(七七五三)〇〇三二五番  
(七五二)〇〇六六七番

高千穂旭楓

〒537

大阪市東成区神路三ノ八ノ十八  
電話〇六(九八一)二二九一四  
(九七二)二七七八番

東大阪旭会会長  
榎本旭風

# 暑 中 御 見 舞

<p>〒160 東京 都 新宿区 三栄町十六番 電話 (三五二) 四五九一</p> <p>日本旭会 大師範 押田 旭 窃</p>	<p>〒081 八戸 市 内丸 九十一番 電話 (二二二) 八七七五</p> <p>正派薩摩琵琶 正調詩吟 指南 正絃会 員 日本琵琶協合理事 最上 穂 洲</p>
<p>〒602 京都市 上京区 東堀川 通 榎木町 角 電話 (七五二) 四〇三三</p> <p>筑前琵琶旭会 師範 京都旭總會 中 島 旭 穂</p>	<p>〒237 本部(事務所) 横須賀市 船越町 一ノ五〇 電話 (四六八) 三六七六</p> <p>横須賀琵琶連盟 會長 山 田 幻 水</p>
<p>〒583 大阪府 羽曳野市 羽曳丘 一ノ九 電話 (七二九) 四四二三</p> <p>筑前琵琶旭会 秋 元 旭 晨 大阪府 三島郡 島本町 桜井 四ノ 電話 (七五九) 五〇四三</p> <p>竹 本 旭 将</p>	<p>〒601 京都市 南区 吉祥院 中島町 三〇ノ 電話 (七五九) 〇二八八</p> <p>琵琶三美会 會長 矢 吹 旭 美 津 田 中 鵬 水 富 山 旭 貴 西 村 旭 富 一坊 寺 旭 清 外門 人 一 同</p>

# 暑 中 御 見 舞

<p>〒359 所沢市 日吉町 一七ノ一三 電話 (四二九) 三二七五</p> <p>日本琵琶樂協会 企画部 錦心流琵琶 大館派 教授 平 井 洲 誠</p>	<p>〒164 東京都 中野区 中野 二ノ二五ノ六 電話 (三八二) 〇八九二 (三六二) 〇六二二</p> <p>薩調晴風会 會長 浅野 晴 風</p>
<p>〒040 函館市 青柳町 二六ノ一四 電話 (二六) 一六二三</p> <p>高橋 蘇 水</p>	<p>〒171 東京都 豊島区 高松 三ノ一二 電話 (三九五) 三六四五</p> <p>筑前琵琶 大師範 藤 卷 旭 鴻</p>
<p>〒570 守口市 緑町 土居 団地 十一号 電話 (六九九) 五六二五</p> <p>大阪吟水会 小 川 吟 水 小金 西 甫 北 寄 靖 桜 村 玄 山 田 吟 山 田 吟 增 田 憲 田 憲 甫 甫</p>	<p>〒454 名古屋市中川区 中島 新町 中川住宅 五ノ四〇一号 電話 (五二) 三三三〇</p> <p>錦心流琵琶秋声会 名古屋本部 阿 部 久 子</p> <p>〒141 東京都 品川区 西五反田 四ノ八ノ 電話 (三九九) 八三三二</p> <p>前 田 秋 声</p>

を終えたとき、ふっと頭によみがえったのは徳川家康の遺訓として親から貰った書。いわく「人の一生重き荷物を背負いて遠き道を行くが如し」。

現在館山さんの弟子は息子の宣昭さんを含めて四人。先ごろ東京青山学院講堂で開いた「平曲と声明鑑賞会」では館山さんの最初の弟子だった国語学者金田一春彦氏も出演して花を添えた。(以下略) 一琵琶を膝に平曲を語る館山氏の写真は省略。

琵琶行について

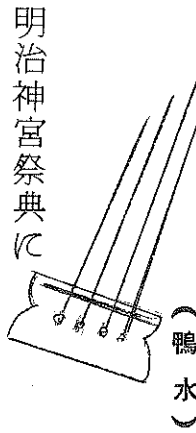


大絃は嘈嘈として急雨の如く、小絃は切切として私語の如し。

白楽天が元和十一年(八一六)四十五歳の秋、友人を潯陽江まで送った時、琵琶を弾く女に会って、その琵琶の音楽の美に感じ、その女の身の上話に同情し、それにつれて、自分の左遷の他しさを歌った七言の樂府である。凡そ六百十六言の長句で、名づけて琵琶行と曰ふ。彼の直接身辺に起ったことを主題としただけに主観的抒情的な詩であって、第一大段は主として琵琶の音調を詩句に移し、感覚美を表現し、

第二大段は琵琶の女が身の上話を物語り、人生の転変定めない悲しい相を描き、第三大段は白楽天自身の身の上話を語り、不遇を二人に共通な悲しみを味わい、琵琶名手に会った感激を述べ、

琵琶の名手と中唐第一の詩人とが芸術の美を通して相識り相感激してこの作品が生まれ、誠に浪漫的伝奇的な感情の溢れた作品である。明治には高崎正風氏の「潯陽江」という琵琶歌があつて人口に膾炙されている。



明治神宮祭典に

普門義則

…去る四月二十日、明治大帝を祭る明治神宮春季大祭の行事として薩摩琵琶の正式奉納が行われたのは始めてのことであると神宮の御担当の方から承り感激いたしました。雅楽は宮内庁雅楽部の演奏、邦楽邦舞も各家元能楽は宝生の家元、三曲も中能島欣一氏等芸術院会員の第一級の方々で、小生は琵琶界の代表ではありませんが、その心構えて誠心をこめて献奏をさせていただきました。来年的にお正月には今回の奉納をフィルムに納めてあるのを映写すること、当日録音出来な

暑 中 御 見 舞

暑 中 御 見 舞

<p>〒606 京都市左京区下鴨藪倉町一六 電話〇七五(七八一)三〇五〇番</p> <p>馬場 鴨水</p> <p>錦心流琵琶</p>	<p>〒160 東京都新宿区西新宿六ノ三ノ三 山崎錦幽方 電話(三三二)一〇六〇番</p> <p>柏会々員一同</p> <p>日本芸術琵琶</p>	<p>〒011 秋田市土崎港中央四丁目九ノ二 電話〇一八八(四六)三三三四番</p> <p>星野 嶺水</p> <p>錦心流一水会秋田支部</p>	<p>〒181 日本琵琶三位研修同志会本部 東京都三鷹市上連雀二ノ九ノ十二号 大村方 電話〇四二二(四四)一四一六番</p> <p>伊集院 鼓城</p> <p>同志一同</p> <p>謙虚枯淡の風格を伝承</p>
<p>〒389-12 埼玉県大里郡寄居町大字寄居 電話〇四八五(八一)一七四〇番</p> <p>大井 錦淀</p>	<p>〒184 東京都小金井市本町一ノ八ノ五 電話〇四二三(八一)三三四四番</p> <p>伊藤 磐水</p> <p>錦心流一水会多摩支部長 武絃会事務所</p>		

<p>〒176 東京都練馬区豊玉北五ノ一一 芸の友社 電話(九九一)〇三六三番</p> <p>鈴木 誉士</p>	<p>〒164 東京都中野区中央一ノ三三ノ六 電話(三六一)七七四〇番</p> <p>仲川 秀邦</p> <p>薩摩琵琶</p>	<p>〒249 逗子市桜山三ノ四ノ五三 電話〇四六三(七三)二二二〇番</p> <p>平野 鉦水</p> <p>錦心流琵琶教授 鉦水会</p>	<p>〒790 松山市柳井町一丁目 電話(二二)二二二七番</p> <p>佐藤 晃絃</p> <p>日本琵琶楽協会々員 愛媛琵琶連盟顧問</p>
<p>〒168 東京都杉並区下高井戸五ノ二二 電話〇二一(三〇三)五八九四番</p> <p>竹下 翠風</p> <p>翠琵琶宗家</p>	<p>〒651 神戸市葺合区八幡通四ノ二ノ一七 久徳ビル 電話〇七八(二二)一六一〇番</p> <p>久徳 旭蘭</p> <p>筑前琵琶橋会師範</p>		



かつたため再録してほしいとの申出が神宮側からありましたので、自宅にて「城山」を録音して届けました。一後略(通信)

六月一日明治神宮発行「代々木」誌掲載。抜萃「...約三千名が参列、神前では舞楽、邦楽、能狂言、三曲など華麗な古典芸能のあふれる奉納され、特に本年は普門史城氏による薩摩琵琶の演奏が奉納されるなど参拝者の目をうばった一後略(普門氏献奏中の写真は省略)

平井志鳥

さらでもの袋小路の梅雨の蝶  
座禅草退院有無の心電図  
梅雨明けの五管全開歩きまし  
ぼり丹を画き余白の美しきかな  
土用浪浪の間の間の豊かなり

吉井良三

綿々と続く語りと弦牙えて  
至悦の境地に時を忘れぬ  
弦捧く白き二の腕其の奥の  
熱き想いは窺うを得ず

五月三十一日(休)昼弘前市中村支部長琵琶道場で開催。総会のと演奏会に移り金剛石一成田月光▼菅公一丹代如水▼太田道灌一福岡光峰▼常陸丸一福島調水▼本能寺一北川碎水▼大高源吾一木下旭青▼接待一佐藤森水▼石童丸一佐藤学水▼白虎隊一平尾桜水▼舟弁慶一三浦淡水▼八甲田山一支部長中村光水。以上演奏を終り懇親宴を開いて和気霽々裡に散会した。

堺市大鳥神社で琵琶献奏

六月十日(休)昼大鳥神社菖蒲祭に大阪琵琶同好会の協賛で石童丸一米原、島津▼青葉の笛一馬野▼壇の浦一矢野旭信▼城山一水谷旭甫▼坂本竜馬一辻旭城▼二〇三高地一石橋旭嶺▼小栗栖一田中敷水▼曲垣平九郎一中山鳳水▼青の洞門一天津八千代。外に詩吟、剣詩舞、民謡、万才、奇術などのおと懇親宴に移り歓談、七時散会した。

三位研修同志会六月例会

六月十一日(休)昼三鷹市上連雀公会堂。門琵琶外弾法一錦幽、錦道▼利休の最期一山崎錦幽▼武威野一坂本錦道▼川中島一佐藤湘春▼月下の陣一篠宮操水▼赤星崩れ一伊集院鼓城▼桔梗の旗上げ一伊藤磐水▼白虎隊一清水源城▼似城一立野岳朝▼城山一西村島峻▼花紅葉一大和田鶴道▼鉢の木一鈴木鶴龍。尚七、八月は暑中のため休会。

八甲田山遭難兵士慰霊祭に最上穂洲氏献奏

六月二十三日(金)八甲田山麓幸畑の陸軍墓地に於て八甲田山雪中行軍遭難史蹟保存会主催の七十五周年遭難兵士慰霊祭が盛大に挙行され八戸市の最上穂洲氏が薩摩琵琶「吹雪の敵」

を献奏し多数の遺族や一般参列者一千数百人に深い感銘を与えた。尚此処では観光期間中毎日この録音テープを放送されているが四囲の林間にこだまして往時の壮烈さを偲ばしめらる。

日露の風雲日毎に急を告げつつある時、雪の北滴シベリアでの厳寒に耐える訓練として歩兵第五聯隊が八甲田山雪中行軍を敢行して悲惨な結果をもたらしたのを歌った琵琶歌「吹雪の敵」は当時の真相を遺憾なく喧伝してゐる。

夏季合同演奏会

六月二十四日(休)一時半東京杉並区高円寺会館。日本芸術琵琶会・筑前琵琶会共催。秋風故郷の山一若宮旭佳▼本能寺一山崎錦幽▼二〇三高地一長岡旭玲▼俊寛(上)一坂入俊風▼羅生門一平田旭舟▼未練西行一安田旭富▼彰義隊一青木早水▼衣川一杉本旭童▼青の洞門一橋本旭司▼潯陽江一山田洲鳳▼若き敦盛一伊藤旭暢▼山伏接待一高田栄水▼柳の精一若宮旭登▼三味線平田旭舟▼修善寺物語一杉山旗水・絃都錦穂。外に詩吟舞四題。

竜吟同好会月例会

六月二十四日(休)一時東京新宿洲鳳会館(代表者鈴木流泉氏) 一次号詳報!

錦心流琵琶演奏会

六月二十五日(休)正午豊橋市吉田町公民館、

京都琵琶協会月例会

①六月十七日(休)本部平井春嶺氏宅。梅雨晴れの今年一番といふ三十五度二分の猛暑を克服して好きならばこそ同志が集まり冷房のよく利いた二階座敷で伊吹正陽一桶狭間▼馬場鴨水一常陸丸▼戸田旭公一本能寺▼山岡旭清一常陸丸▼牧南水一川中島▼桜井旭富一小栗栖▼水内煖水一菅公▼平井春嶺一時は今也▼植村寛水一河川島▼演奏なし一梅原旭濤荒木旭媛。このあとビールで乾盃、御来遊の伊達氏土産の盛寿司を御馳走になり、七月二十三日祇園八坂神社恒例演奏会の打合せ、八月二十日開催の三美会演奏会に協会員二名応援出演の人選その他二、三の協議をして楽しい半日を送り八時をこやかに散会。

②七月一日(休)同所にて開催。平井、水内、桜井、牧、山岡、矢吹、梅原、馬場、伊吹、植村各会員の外今般新丸に入会された楊嶽水氏(三浦蓮水女史推挙、平井氏推薦)が出席、数氏研修演奏のあと今秋開催の協会創立三十周年記念大演奏会の打合せその他の協議をなし夕食は附近に新装開店の料亭「あざみ」に赴きビールで乾盃、七時半散会。

主催一水会豊橋支部。月下の陣一二人▼城山一二人▼白虎隊一二人▼屋島の誉一木下▼飯田部隊長一小川▼板橋の別れ一齊竹▼新撰組一小林典水▼長篠の露一石黒石水▼長篠の戦一山本宝水▼豊川女子挺身隊一吉見輝水▼野田の笛一菅沼穂水▼天目山一神藤敏水▼(以下来賓)桶狭間一柿沢篁峰▼吹雪の敵一水谷浩水▼木村重成一奥村慧水▼吉野落(一)一小野鶴彦▼舟弁慶一太田杯水▼楠正成一支部長田中訴水。外に詩吟三題。

琵琶の心(筑前琵琶演奏会)

七月二日(休)正午神戸市生田区民小劇場、主催柴田旭堂会、後援日本旭会外。襲名三十三周年記念演奏会で文部大臣、兵庫県知事、神戸市長の祝詞もあり梅雨晴れの天候に恵まれ大盛況を呈した。(第一部)四絃鳥の曲。お江戸日本橋一唄三。琵琶歌六。絃九の大合奏▼太田道灌一野口▼四條畷一首藤旭暉▼羅生門一田中旭冠▼秋風故郷の山一西沢旭朗。絃旭堂外三人。立方一人▼齊藤実盛一巽旭悦。絃旭堂▼壺阪寺一酒井旭韻▼琵琶詩吟安宅の関一中治康彦▼若き敦盛一景山旭貴。絃旭晶▼わかによせて一宮村旭当。絃旭堂外三人▼本能寺一空野旭昭▼伽羅の兜一高千穂旭楓▼漫吟一秋元旭展▼扇の的一池田旭柴。絃旭堂▼(第二部)伏見の吹雪一西村旭瑞▼白さつき一美喜旭悠▼四條畷一松尾旭苑▼壇の浦一多田旭禎、半田旭甫。絃旭韻、旭苑▼衣川一村山旭勢▼大楠公一稲田旭晃。絃旭堂、旭冠

紅(くれない)会演奏会

七月二日(休)正午東京日本橋三越劇場、会長押田旭窈女史・司会NHK鈴木健二氏。会員の外薩筑名手数氏ゲスト出演、盛会であった。会歌くれない一同合奏▼扇の的一横井。絃旭凰▼堅田落一伏見旭毅、浜野旭愛、宇野旭昌▼坂崎出羽守一藤内旭須美▼山吹の夢一大野。絃旭連外二人▼秋風故郷の山一石井旭良▼大高源吾一三上旭凰▼大楠公一原田旭柳。絃旭窈▼二〇三高地一若宮旭登▼大物の浦一仲川旭邦。絃旭窈▼合奏曲不二一旭凰、旭須美、旭良▼屋島一宮武旭豊▼須磨の浦風一阿部久子▼常盤の前一桑名洲聖▼羅生門一原島旭粧▼龜山上皇一遠藤鶴東▼おまかげ一会主押田旭窈▼琵琶詩舞俊寛一佐々木滸文、若水桜松▼舞踊橋式三番叟一原島旭粧外三人。絃旭窈外六人。お嘶子玉藻会。立方二人。

晴風会夏季例会

七月九日(休)夕六時東京杉並区高円寺会館(